

## 第3回機関評価委員会（第4回会合）議事概要（案）

日時：平成18年3月2日（木） 17:30～20:00

場所：三菱ビル 9階 964・965会議室

（出席者）

機関評価委員：池上委員長，相澤委員，小林委員，高橋委員，都河委員，中島委員，中村委員，若杉委員

政策研究所：小中所長，桑原総務研究官，丹羽総括，近藤総括，今井総括，佐々木課長，犬塚課長，飯島課長

事務局：科学技術政策研究所企画課 安達補佐，小野山（財）未来工学研究所 菊田，大竹

（発言者：○…機関評価委員，●…科学技術政策研究所関係者）

### 1. 第3回会合における質問事項について

- 人的リソースの確保に関して，外国人研究者に客員として来てもらうのに，日本学術振興会のフェローシップ制度では対応が十分にできないようであるが，科学技術政策研究所が独自のフェローシップを持つということは考えられないのか。
- そのような予算を持っていないので難しい。ただし，よい人がいたら常勤で採用することは可能である。
- テーマの継続性については，前回の機関評価でも研究の調査項目が多過ぎることが指摘されたとおり，戦略的にその順位づけを検討して選択する必要がある。このような戦略の詰め方というのが非常に重要である。
- グループごと，分野ごとにテーマの継続性を考えるのではなく，研究所全体のミッションに照らして継続すべきテーマ，新たに加えるべきテーマの検討を行い，実施すべきテーマの設定を行っていきたい。

### 2. 報告書の骨子案について

#### 《報告書の書きぶりについて》

- 前回機関評価での指摘事項への対応について，対応できたことに関する記述が2点だけというのは少なすぎる。具体的に書き込む必要がある。総括表のような形ではなく，文章で書き込んだ方がよい。
- 研究所としてやるべきこと，やらなければならないことはたくさん書かれているが，予算と人員を考えたときに果たして実施可能なのかという疑問がある。限られたリソースであるがここまでは実施して欲しい，など評価委員会が仕分けする必要がある。評価委員会の報告は所

長に対して行うものであるが、新たなリソースが必要な場合には、そのことを文部科学省にもアピールする必要がある。

#### 《前回機関評価での指摘事項への対応について》

- 「諸外国の科学技術政策への意見発表」というのは、この研究所がやるべきことなのかどうか。日本の政府と非常に密接な関係がある他の国の政策に関して、研究所がコメントするのはあまりイメージできない。
- 行政側との人事交流については、前回機関評価でも指摘があったとおり、行政官が研究所で一定のキャリアを積んで、ここであげた成果が次のポジションへのプロモーションにつながるような、そういう流れを作ることが重要ではないか。一方、研究所の職員も行政側へ出向して、現場を知って、活躍し、戻ってくる必要があるではないか。
- 科学技術政策、科学技術統計、インディケータなどについてアジアの4ヵ国でネットワークを組んで共同研究を行っているとのことだが、これは非常によいことである。アメリカ、ヨーロッパと比べてアジアの情報はほとんど整備されていないので、共同研究を行いながら科学技術政策研究分野のデータベースを充実していく、連携を拡げていくというのは非常に重要な取り組みである。

#### 《NISTEP の使命について》

- 「非常に地味で手間のかかるような研究に従事する役割がある」というのは、実は非常に難しいことではないか。本当に必要であるが人がいやがるようなテーマがあれば、もちろん実施する必要はあるが。手間をかけるだけの予算・人材も限られているのではないか。
- 科学技術政策研究所が政策立案の一部を担うという政策立案に対する寄与については、具体的にどんなことを行ったのかということとともに、それについての評価やコメントについても報告書に書き込むべきである。
- 総合科学技術会議や文部科学省との情報交換のアンテナを高くするという点については、あえてこういうことを言う必要があるのか。すでにコミュニケーションが相互にとれていて、政策立案に十分に貢献しているとするならば、情報交換のためのアンテナが重要というような内容が必要なのかどうか。
- NISTEP の使命の中に国際化の視点が入っていないのはおかしい。活動の国際的連携についても記述するべきである。

#### 《機関運営面について》

- 「機動的な研究」と「待ち伏せ研究」は必ずしも相反する方向性のものではなく、それぞれをどのようなバランスで行うかという問題として捉えるべきである。「待ち伏せ研究」は研究者が本当にやりたい研究ということであり、研究所としてどの程度それを認めるかの判断が必要に

なる。

- スキル向上のための所内講演会については非常に活発に行われていて評価できるが、一方で、テーマの分野や実施の回数についてはもう少し整理する必要があるのではないかと。将来的に研究所が取り組んでいきたいテーマ、研究所の役に立つテーマを中心に選ぶということも重要ではないか。

#### 《調査研究面について》

- 第4期基本計画策定に向けた第3期基本計画のフォローアップについては、クライアントである総合科学技術会議の要望をきちんと踏まえた上で実施する必要がある。情報交換を密に行うことが重要である。
- 第3期基本計画では人材育成が大きく採りあげられているが、人材育成を考えるならば大学院教育をもっと重要に考えるべきである。また、大学院の教育プロセスと産業界との連携も重要になってきている。したがって、大学院教育や産学連携による人材育成などについても科学技術活動全体をシステムとして捉えて、今後の調査研究テーマとして採りあげる必要がある。